

◆池田亮二 選

一. 赤く青く黄いろく黒く戦死せり 渡邊白泉

今、一句選べと言われたら迷わず選ぶ一句です。この春から、ロシアのウクライナ侵攻がはじまり、ニュースは連日、破壊、略奪などの悲惨な状況を伝えています。キナ臭い空気には、もしかしてとんでもない狂気がこの国をも襲うのではないかと思うほどです。

神を共有しない人間は、共に天を戴かない敵であり、排除すべきものと考えます。国際法よりも「わが神」を優先するのです。そして権力者は兵士にあくなき強暴と狂気の殺戮を求めます。兵は殺しの道具なのです。老子に「兵は不祥の器にして、君子の器にあらず。…勝ちて而も美ならず、而るにこれを美とする者は、これ人を殺すを楽しむなり」とあります。かの大統領は殺しを楽しんでいるのでしょうか。

そして、兵自体もまた獣性をもっています。日本の敗戦時、私は中国長春に住んでいて、占領軍ソ連兵による略奪、暴行におびえる日々を過ごしました。女性は頭を丸刈りにして顔を汚し、男の姿になって難を避けていました。

兵による蛮行は、日中戦争における日本兵、ベトナム戦争におけるアメリカ兵にも多かれ少なかれ見られました。このような獣性を制御するには戦火が止み、廃墟の中で人が理性を取り戻すまで、ただ待つしかないようです。

春狂乱人が野獣になるとき

亮二



二. 墓地も焼跡蟬肉片のごと木木に 金子兜太

敗戦後、トラック島から帰還した金子兜太が見たのは、「一望焼野原で白山から巣鴨に向かって走る白い道の両側は、怪獣の臓腑のような瓦礫とところどころに立つ焼けた木々だけ」という情景でした。東京が広大な墓地のように受けとめられたか。

敗戦時の中国長春には、八方から侵攻してくるソ連軍や暴徒に追われた日本人難民が続々と流れこんできました。そして、元関東軍の兵舎などに収容されましたが、大発生した発疹チフスと飢えと厳寒の冬に耐えられず、毎日数十人が命を落したのです。死者はそのままの姿で、あらかじめ掘られた壕に次々と埋められました。墓標さえ立てられずに。

今その場所は公園になり建物が建ち、そこに多くの死者が眠っていることは、おそらく大部分の市民は知らないでしょう。

東京も長春も戦場ではなかった。そして、埋められたのは兵士ではなく、多くは女性、子ども、老人です。近代戦では戦争で死ぬのは兵士の数より一般市民の方が多いといわれます。そして、一旦独裁者の狂気から戦争が始まれば、私たちの今いる場所は即戦地となり、墓地となりかねないのです。

墓標なき墓に万骨枯れる花 亮二



三. 浮浪児昼寝す「なんでもいいやい知らねえやい」 中村草田男

敗戦後二年目、中学生の私は受験のための一人旅で列車待ちの一時、上野公演で握り飯を食べていました。突然眼の前に私と同じ年くらいの浮浪児が立つ

ていました。薄汚れた顔で、じっとこちらを見ているのです。長旅のため二日分ほどのおにぎりを持たされていたのですが、それを守るだけ考えて、私は固まっていました。彼が飢えていることには思い及びませんでした。何秒か、何分か後、彼は黙って立ち去りました。あの彼はその後、どう生きてろうか。

今回、戦争に関わる句ばかり選んだのは、ウクライナの状況などの中で、三鬼、白泉、六林男たちならどんな句を詠んだろうと、ふと思ったからです。

かつて戦争の生々しい現実を詠む前衛俳句に多くの若い俳人が傾倒したのですが、戦後の復興と平和の中で、焼跡、ヤミ市、浮浪児などの戦争の傷痕も記憶も消えてゆきました。

そして、俳句は、「春夏秋冬自然の季節感の中に現れた人間や社会の事象のみを詠む（虚子）」という伝統主義に回帰し、新聞、雑誌の俳句欄にも戦争を含む時事性の俳句はほぼ皆無です。戦争は、人間社会の滑稽の最たるものと思えるのに！

砲煙弾雨あいにくのお天気ねとおままごと 亮二

